



明治学院大学図書館附属

日本近代音楽館

Archives of Modern Japanese Music

館報(創刊号)

目次

館報の刊行にあたって

年表 資料継承協定締結から館報創刊まで

開館記念パーティアルバムから

寄稿 新音楽館に期待する

資料受入報告

第一回レクチャーコンサート開催

特別展「五線譜に描いた夢―日本近代音楽の「五〇年」予告

編集後記

館報の刊行にあたって

日本近代音楽館長 秋月 望

明治学院大学の日本近代音楽館は、本学図書館の専門資料館として二〇一一年五月に開館しました。遠山一行氏が一九六二年に設立した旧遠山音楽財団の図書館が一九八七年に日本近代音楽館となり、そこで収集・所蔵されてきた約五〇万点に及ぶ近代の音楽資料を本学が引き継いだものです。手書きの楽譜や書簡、原稿、演奏会プログラム、音楽雑誌や録音資料など一五〇年にわたる近代日本の音楽の歩みを物語る貴重な資料が取められています。これらの資料は、音楽研究者や演奏家はもとより、音楽に関わる全ての人々が、適切かつ持続的に利用できる環境が整えられることが重要だと考えています。

今年、明治学院は、ジェームス・カーティス・ヘボンがヘボン塾を開いてから数えて一五〇周年を迎えます。その一五〇年は、キリスト教理念に基づく近代教育を日本に移植し、それを確立・推進して行く一五〇年でしたが、他方日本の近代音楽にとってもその一五〇年は受容と発展の歩みを続けて来た年月でした。本学では、近代音楽館所蔵の資料を中心として、公益財団法人東京オペラシティ文化財団、NHKプロモーションなどと共催で今年秋に「五線譜に描いた夢―日本近代音楽の一五〇年―」展を開催いたします。当音楽館以外の関係諸機関所蔵の音楽資料もあわせて、音楽にまつわる多種多様な資料を分類・整理して系統立てて展示することで、日本の近代音楽一五〇年の歩みをご理解いただけるものと思います。また同時に、音楽に関わる資料の収集と保存の重要性と意味についても知っていただくよい機会になればと考えています。

当音楽館では、今後とも新たな音楽関係資料の収集に努めると同時に、所蔵している資料の整理を進めて新たなデータベースを構築し、関係の方々に有益な情報をご提供できるよう努力して行く所存です。

今後ともいっそうのご支援とご協力をお願いいたします。

(あきづきのぞみ 国際学部教授)

日本近代音楽館収書委員長、副音楽館長

岡部真一郎

おかげさまで、明治学院大学図書館付属日本近代音楽館が開館し、新たな歩みを始めて、一年半余りが過ぎました。既に、研究はもとより、演奏や録音などの実践、あるいは展覧会などの企画にも、多くの方々にご利用いただいています。また、昨年の秋には、音楽館主催によるレクチャーコンサートのシリーズも、西村朗氏を白金キャンパスのアートホールにお迎えしてスタートすることができました。

さらに、今年の秋には、所蔵資料を中心とした大規模な展覧会を東京オペラシティアートギャラリーにおいて開催します。専門家はもちろん、幅広い層の方々に、音楽の力とアーカイヴの重要性を実感していただける催しとなると考えています。

遠山一行先生をはじめ、旧近代音楽館の運営に携わっていらした方々、関係者のみなさまの崇高な理想と精神を受け継ぎながら、我が国の楽壇、そして内外の芸術文化のさらなる発展に寄与すべく、これからも、一步一步、着実に活動を行って参る所存です。

倍旧のご理解とお力添えのほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

(おかべしんいちろう 文学部教授)



日本近代音楽館閲覧室

年表 資料継承協定締結から館報創刊まで

- (二〇〇九年)
 7・24 明治学院、日本近代音楽財団と資料継承協定を締結、日本近代音楽館蔵書寄贈に関する合意書に調印。
 (二〇一〇年)
 1・1 大学事務局長付特命事項担当(近代音楽館受人並びに情報メディアセンター設立準備)配置。
 2・1 図書館付属日本近代音楽館開設準備委員会設置、2・4 二〇〇九年度第一回委員会開催。3・5まで二回。資料受入と受入に伴う諸業務、展覧会「日本の洋楽一五〇年」企画等について検討。
 3・5 二〇〇九年度第二回図書館付属日本近代音楽館開設準備委員会。
 3・31 日本近代音楽財団日本近代音楽館閉館。
 ■二〇一〇年度
 4・13 日本近代音楽財団司書を加え、施設・設備、資料移送に関する打ち合わせ。以後隔週協議。
 4・20 二〇一〇年度第一回図書館付属日本近代音楽館開設準備委員会開催。3・11まで六回。組織、施設・設備、資料移送および展覧会企画等について検討。
 4・28 近代音楽館設置準備室開室。
 4・30～6・30 地下書庫改修工事。
 5・14 明治学院大学図書館付属日本近代音楽館規程制定。
 7・1 日本近代音楽財団より日本近代音楽館蔵書を受贈。音楽司書二名移籍、着任。
 7・15～16 第一次資料移送。
 8・1～9・23 音楽館閲覧室、事務室設置工事、9・29 資料等移動。
 8・3～11 第二次資料移送。
 10・1 音楽館担当課長配置。
 10・16 遠山一行名誉博士学位授与式。
 (二〇一一年)
 3・10 AV設備新設工事完了。
 3・11 明治学院大学図書館付属日本近代音楽館運営委員会規程、同取書委員会内規制定。
 ■二〇一一年度
 4・30 図書館付属日本近代音楽館開設準備委員会解散。
 5・1 明治学院大学図書館付属日本近代音楽館設置(館長増山幸一)。
 5・10 二〇一一年度第一回日本近代音楽館運営委員会開催。3・8まで七回。業務報告ほか。
 5・13 明治学院大学図書館付属日本近代音楽館利用細則制定。

- 5・25 明治学院大学図書館付属日本近代音楽館開館記念パーティー開催。
 5・26 明治学院大学図書館付属日本近代音楽館開館、一般公開。
 5・27 読売新聞社取材(7・1掲載)。
 6・29 音楽之友社取材(『音楽の友』8月号掲載)。
 8・2 大倉文化財団企画展「大倉喜七郎と邦楽」の『幻の堅笛とオークラウロを中心に』に資料出品、協力(9・25まで)。
 9・14 国立国会図書館音楽資料・情報担当者セミナーに参加(9・15とも)。
 (二〇一二年)
 1・24 故渡邊暁雄資料を受贈、特別文庫設置。
 2・21 東京都江戸東京博物館特集展示「太陽の塔 黄金の顔」に資料出品、協力(5・20まで)。
 2・23 日本経済新聞社取材(3・3掲載)。
 3・30 ホームページ公開。
 3・31 初代館長増山幸一退任。
 ■二〇一二年度
 4・1 第二代館長秋月望就任。
 4・18 日本近代音楽館取書委員会専門委員委嘱(塚原康子、西村朗、渡辺裕、樋口隆一、望月京、山下裕二)、委員会を組織(委員長岡部真一郎)。
 4・24 二〇一二年度第一回日本近代音楽館運営委員会開催。12・18まで六回。業務報告ほか。
 5・23 二〇一二年度第一回日本近代音楽館取書委員会開催、資料受入等について討議。
 6・1 新規図書館システムに関し、㈱トッカータと契約。
 8・29 故若杉弘氏蔵書を受贈、「若杉弘資料」設置。
 9・6 国立国会図書館音楽資料・情報担当者セミナーに参加(9・7とも)。
 9・11 二〇一二年度第二回日本近代音楽館取書委員会開催、資料収集方針について討議。
 10・1 古賀政男音楽博物館「大衆音楽の殿堂」平成二四年度顕彰(紙恭輔)資料展示に出品、協力(13・9・30まで)。
 10・3 東京新聞社取材(10・8掲載)。10・6 神奈川県立近代文学館特別展「島崎藤村展」に資料出品、協力(11・18まで)。
 11・21 第一回レクチャーコンサート「東京シンフォニエッタ」とともに「西村朗氏を迎えて」開催。
 12・7 特別展「五線譜に描いた夢―日本近代音楽の一五〇年―」開催正式決定。
 (二〇一三年)
 2・1 『館報』創刊号発行。

開館記念パーティ アルバムから

二〇一一年五月二十五日（水曜日）、一般公開に先立って、音楽館開館記念披露パーティが本学白金校舎大会議場において開かれた。記念文庫関係者、作曲家、演奏家、研究者のほか、関係団体から百名を超える人々が一堂に会し、明治学院大学日本近代音楽館の門出を祝った。

岡部真一郎文学部教授の司会で始まったパーティは、大西晴樹明治学院大学学長の開会挨拶に始まり、来賓遠山一行日本近代音楽財団理事長（旧日本近代音楽館館長）の挨拶、若林之矩明治学院理事長の発声による乾杯のあと、なごやかな懇談へと続き、久世了明治学院学院長、増山幸一音楽館長の挨拶をもって閉会した（役職名は当時）。

終宴後には図書館内七階の音楽館閲覧室、東京都港区有形文化財指定のチャペル（礼拝堂）の見学も行われた。なお、開館記念として、当館「山田耕筰文庫」収蔵、山田耕筰作曲「赤とんぼ」（三木露風詩）自筆譜の複製版を作成した。





左より、増山幸一音楽館長、大西晴樹学長、若林之矩理事長、遠山一行氏、久世了学院長、岡部真一郎文学部教授

明治学院大学図書館付属日本近代音楽館開館によせて
 『開館パーティー・スピーチから』

遠山一行



遠山一行氏

新しい日本近代音楽館の開館にあたりまして、本来、私はおめでとう、と申し上げるべきところでございますが、むしろ、ありがとうございます、とお礼を申し上げたい気持ちです。私どものコレクションをお譲りしたときにお願いたしましたのは、公開をしてほしい、ということでしたが、それが今日こうして実現いたしました。大変嬉しく思っております。

この間、この新しい施設を拝見させていただきましたけれども、大変立派な、きれいな施設でありまして、感謝いたしております。

このコレクションが多くの人に利用されてゆくことを心から祈っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

(とおやまかずゆき 音楽評論家、元日本近代音楽財団日本近代音楽館館長)

寄稿 新音楽館に期待する

新しい音楽館によせて

皆川達夫

今から半世紀前の一九六二年(旧)「遠山音楽図書館」の発足にあたって、わたしはまったくゼロの状態から資料収集を担当してまいりました。旧制高等学校時代からの先輩であられた音楽評論家遠山一行氏から「是非とも協力して欲しい」というご要請によるものです。そのころから志を音楽史研究に立てていたわたしは喜んでお引き受けし、当時の日本の音楽界に欠けていた中世・ルネサンス期と現代の音楽資料にとくに重点をおいて収集を開始しました。さらにその後、「日本近代音楽館」と改称する際、日本の作曲家たちの自筆楽譜を収集する方向にすすめてゆきました。

これにたいして多くの日本人作曲家たちが積極的に作品楽譜をご寄贈ご寄託くださるようになりましたが、反面、収納資料が予想以上に増大してもはや館内におさめきれないことになり、加えてこの音楽館を財政的に個人が維持するのが困難な状況におちいり、他の機関への移行を考えざるをえない事態にいたしました。

幸いにも明治学院大学大西晴樹学長(当時)、樋口隆一教授をはじめとする方々のご努力のおかげで、同大学図書館がこれを全面的にお受けくださることになり、無事に移行が完了いたしました。今のわたしとしては、これまで育ててきた子供たちが自分の手から離れていったという寂しさと、わが子らが安心して暮らせる親元にお任せできたというよさがありますが、ないまぜになつた複雑な心境であります。

これらの音楽資料は国の重要な文化財であり、大切な宝物です。明治学院大学によってさらに大きく養育成され、全国民的な支持のうえに維持されてゆくよう切に願わざるをえません。

(みながわたつお 立教大学名誉教授)

「誰か」としての意義

池辺晋一郎

世の中には、誰かがやらなくてはいけないけれど、じゃ誰がやる?というものがあつた。欧米とは異なる独自の進展をしてきた我が国の近代音楽の歴史を調べ、整理する仕事は、まさにそれ。「誰か」は、遠山一行先生主宰の近代音楽財団だつた。しかし残念ながら遠山先生も高齢になられ、維持がむずかしくなつた。同財団の評議員の一人であつた僕も、そのむずかしさを感じてた。

そこへ朗報! 明治学院が継承してくれる!

幸田延の二曲のヴァイオリン・ソナタを補作し、オペラ「鹿鳴館」を作曲し、小松耕輔や信時潔の研究に頭を突っ込みかけたこともある僕としては、こんなに嬉しいことはない。

歳月の経過とともに「近代」は膨張していく。近代音楽館の務めも膨張していく。どんなにか大変な仕事だろう。だが「誰かがやらなくてはいけない」。今、その「誰か」としてすつくと立つ明治学院に、心からの敬意と期待を抱くのである。

(いけばしんいちろう 作曲家、東京音楽大学教授)

近代音楽館に寄せる想い

芥川眞澄

「僕の大事なものは近代音楽館。リンさんに連絡すれば、なんでも判っているから」と突然話したのは、芥川が逝く数日前のことでした。続けて「リンさんって、林って書くんだよ」と。

そして慌ただしい日々を過ごして二ヶ月ほど経つた春、遠山一行氏から「資料はどうかおつもりですか?」というお電話をいただいた時には、迷うことなく、このことをお伝えすることが出来ました。

日本近代音楽館が開館した一九八七年は、東京音楽学校の奏楽堂が、八年にもおよび保存運動の結果、ようやく上野公園内に移築保存が完成した年でもあります。

明治以来の先輩たちが、血の滲むような辛苦の中で新たな芸術的創造に向かつた不屈の精神、伝統の意味するもの、それらの歴史のうえに現在の自分たちがある。それらをもっと真剣に考え、それ故に大切に残してゆかなければならないのに、国は、文化や芸術に対してあまりにも冷たい、と芥川は折あるごとに話しておりました。

明治学院大学に移管されて間もなく、尊敬する先輩たちに守られるように、また、同じ時代を熱く過ごした友人と隣り合い、あるいは向かい合つて並ぶ収納庫を見せていただき、遠山氏の強いご意志から始まつた近代音楽館の重要な役割を着実に継承していただけたことに、心が強く揺さぶられました。

滝廉太郎から始まる一〇〇余年の歴史の上に繋がる未来に向けて、どうぞよろしくお願いたします。

(あくたがわますみ 故芥川也寸志氏夫人)

『日本近代音楽館報』創刊を祝して

末吉保雄

日本近代音楽館の旧、その健在の時代。同僚作曲家の多くは、自作楽譜の将来の行き所に不安を持ちませんでした。昔はともかく今の世に、晩年または死後に跡継ぎがなくなると整理してくれるとは信じなくとも、近代音楽館に持つて行けばなんとかしてもらえらうと、まあ、思い込んでいたわけです。「閉館」の知らせに、太平の夢は破れました。

当協会は創立八〇年をこえました、情けない事に、今もって、会員作品の楽譜を置いておくこともできません。五〇年代以降の主催演奏会の全録音（作品音源）さえ、最近ようやくデジタル化を終えたところです。整理して、公開して、ユーチューブで：etc. 世界あちこちからの要望に取り巻かれながら、おかねが捻出できません。

日本近代音楽館の新、その出発は、我々にどれほど心強いことか。：もう、思い込んではいませんが：なにかお役に立つことは無いでしょうか？ おかねは有りませんが、まあ、かつての同業大家の、生き残り：ではありますので。せめて、出せる知恵くらい有るといいのですが。新の、ご健闘を心からお祈り致します。

（すえよしやすお 作曲家、日本現代音楽協会「現音アーカイブズ」担当理事）

開館を祝う

伊藤京子

『日本近代音楽館』開館の実現は、現代を生きる私達日本の音楽家として、本当に嬉しいことです。

長い歴史をもつ西洋音楽を基盤として日本の音楽家の先達の方々が築き上げられて来られた貴重な資料が多数収められたことは、本当に重要なことだと思います。

私は日本の歌い手として、歌に関する先達の方々の『歌曲』『オペラ』などを、小さな力ではありますが歌いつづけて参りました。

先達の方々の創りつづけて来られたその道を、資料としてだけでなく、私達は、もつとつと大切に、尊敬の念をもち、そして誇りをもって、その作品を演奏してゆかなければならないと思います。

（いとうきょうこ 声楽家、日本演奏連盟理事長）

日本近代音楽館によせて

久保田慶一

平成二二年四月に、日本音楽学会は音楽図書館協議会と国際音楽資料情報協会日本支部の協力を得て、「日本の音楽資料」調査委員会を設置しました。同年、文化庁から「音楽情報・資料の収集及び活用に関する調査研究」の業務を委託されることになり、「日本の音楽資料」のデータベース化のための調査をすることになりました。平成二二年度は、日本人作曲家の手稿譜、一九四五年以前に我が国で出版された楽譜、西洋音楽の手稿譜、一九〇〇年以前に外国で出版された楽譜を対象に、全国の図書館や資料館に対してアンケート調査を実施しました。その後、平成二三年度と平成二四年度も、文化庁からの委託業務を受け、主に一九四五年以前に我が国で出版された楽譜を対象を限定して、現在、平成二五年度のデータベース公開に向けて、調査研究をしております。これらの調査から私は、全国の国公立図書館や大学図書館における音楽資料の扱い方はきわめて憂うべき状況にあることを痛感しました。委員会の調査では、日本近代音楽館の職員の方々に多大な貢献をいただいておりますが、日本近代音楽館やそのスタッフの方々が今後、日本の音楽資料の保存や管理においてきわめて重要な役割をはたしていただけることを確信するに至ったことも確かです。今後のさらなる発展を祈念してやみません。

（くぼたけいいち 国立音楽大学大学院教授、日本音楽学会「日本の音楽資料」調査委員長）

日本近代音楽館再開を祝って

金澤正剛

今回日本近代音楽館が正式に明治学院大学図書館内に移設され、本格的に業務を再開されたことに対して大いに期待するとともに、心からお祝い申し上げたいと思います。

われわれ音楽学者にとって何よりも大切なのは音楽の資料であり、それを管理し、提供してくれる図書館です。私自身はヨーロッパの古楽を専門とする研究者ですが、日本人であることから、国際的には日本の音楽に関する仕事を期待されるのが少なくありません。今から約四〇年ほど前に『ニューグロウヴ世界音楽大事典』の編集が始まった際、日本関係の項目についてその監修と数多くの執筆を依頼された時、頼りになったのがまず遠山図書館、さらにその後の日本近代音楽館の存在でした。特に現代日本音楽に関する調査を行った際に、資料の提供は勿論、館員の方々から受けた積極的な協力が無かつたらば、私はこの仕事をやり遂げることは出来なかつたことでしょう。心から感謝する次第です。

現在日本近代音楽館は近代、現代の日本の音楽に関する資料を数多く所有されています。それらは必ずや将来、日本音楽史にとって不可欠の資料の宝庫となることは疑う余地ありません。その価値が国際的にも極めて重要であることを誇りとして、今後未来に向けてますます発展されることを期待する次第です。

(かなざわまさかた 国際基督教大学名誉教授、国際音楽資料情報協会 (IAML) 日本支部長)

音楽館に期待する

古川 聡

音楽図書館協議会は、我が国の音楽資料を有する諸機関の相互協力を進め、音楽図書館活動の振興を図り音楽文化の発展に寄与することを目的に設立された団体です。日本近代音楽館の前身である遠山音楽財団は一九七一年六月の協議会発足時のメンバーでもあり、本協議会の初代理事長を一九七八年から一九八四年まで、遠山一行氏が務められました。日本近代音楽館の活動は、日本の近代および現代音楽を対象とする専門図書館として、特に日本人作曲家の作品収集の拠点としてその存在意義は非常に大きいと言えましたが、二〇一〇年三月に閉館となり音楽図書館協議会を退会されたことは、音楽図書館協議会として非常に残念なことでした。しかしその後、二〇一一年五月に明治学院大学付属資料館として開館され、貴重な資料が利用者に再び提供されるようになったことに安堵いたしました。今後は一刻も早く音楽図書館協議会のメンバーとして復帰され、我が国の音楽文化の更なる発展に寄与していただけることを切に望んでおります。

(ふるかわさとし 音楽図書館協議会理事長、国立音楽大学教授)

資料受入報告

●新設記念文庫

「渡邊曉雄資料」

二〇二二年一月二四日、指揮者故渡邊曉雄氏(一九一九・六・五～一九九〇・六・二二)の資料を受贈、「渡邊曉雄資料」を新設した。

日本フィルハーモニー交響楽団創設に尽力、初代常任指揮者を務めた渡邊氏は、幅広いレパートリーや斬新な演奏スタイル、邦人作曲家への作品委嘱と初演(日フィル・シリーズ)で当時の音楽界に新風を送る一方、東京藝術大学などで後進の指導にも力を注ぎ、門下から大町陽一郎、岩城宏之、山本直純、小林研一郎を始めとする俊英を輩出した。

受贈資料には、演奏会プログラム、録音資料のほか、音楽活動、経歴に関わる文書、スクラップ、記録、写真や、「日本シベリウス協会」「津山国際音楽祭」など関連団体の資料が含まれている。

「若杉弘資料」

二〇二二年八月二九日、指揮者故若杉弘氏(一九三五・五・三一～二〇〇九・七・二二)の資料を受贈した。オペラ及びオーケストラの指揮者として世界各地の演奏団体で要職を歴任、幅広い演奏活動を展開した若杉弘氏は、ヴァーグナー「パルジファル」「ラインの黄金」「ジークフリート」「神々の黄昏」、シェーンベルク「ダレの歌」、R・シュトラウス「ナクソス島のアリアドネ」、ツィンマーマン「兵士たち」など、多くの日本初演を手がけ、武満徹、三善晃を始めとする日本人の作品を世界初演した。

受贈資料は、演奏会プログラムのほか、膨大な蔵書のうち、演奏、プログラムミン、研究に使用された楽譜類である。

第一回レクチャーコンサート開催

二〇二二年一月二日（水曜日）、本学白金キャンパスアートホールにて、近代音楽館レクチャーコンサート「東京シンフォニエッタとともに 西村朗氏を迎えて」が開催された。



岡部真一郎副音楽館長（写真①左）の司会で、作曲家三宅榛名氏（写真②）、西村朗氏（写真③右）のお話を交え、昭和前期から現代に至る日本人作曲家の室内楽曲七曲が演奏された。東京シンフォニエッタ（板倉康明代表）の熱演に、来聴者からは、普段あまり耳にする機会のない作品に触れ、興味深く聴いたとの声が寄せられた。

このレクチャーコンサートは今後シリーズ化され、第二回は来年度開催の予定である。



〔演奏曲目〕

三宅榛名作曲「クラリネット、ヴァイオリン、チェロとピアノのための四重奏曲」（一九六四） 西澤春代cl、山本千鶴vn、宇田川元子vc、藤原亜美pf（写真②）
下総皖一作曲「クラリネット小曲」（一九三六出版） 板倉康明cl

松平頼則作曲「フリユートとクラリネット

のソナチヌ」（一九四〇） 齊藤光晴cl、西澤春代cl（写真③）

三島喜代造作曲「鳩を主題とせる小品」（一九三六出版） 板倉康明cl、西澤春代cl、川越あさみcl、藤原亜美pf

西村朗作曲「水のオーラ」（一九九六）

「微睡Ⅲ」（二〇〇三） 板倉康明cl、藤原亜美pf（写真④）

武満徹作曲「カトレーンⅡ クラリネット、ヴァイオリン、チェロ、ピアノのため

の」（一九七七） 西澤春代cl、山本千鶴vn、宇田川元子vc、藤原亜美pf





特別展「五線譜に描いた夢―日本近代音楽の一九〇年」予告

二〇一三年一〇月二日より三か月にわたって、東京オペラシティアートギャラリー（東京都新宿区）において特別展「五線譜に描いた夢―日本近代音楽の一九〇年」が開催される。これは、明治学院創立一五〇周年記念事業の一環として企画された大規模な展覧会で、日本の近代音楽の歴史を資（史）料によって辿り、捉えなおそうとする初めての試みである。音楽館所蔵の貴重資料も多数出品される。詳細は今後ホームページなどを通じて順次告知の予定だが、概要は左記の通り。

【概要】

会 期 二〇一三年一〇月二日（金）～二月三日（月・祝日）

会 場 東京オペラシティアートギャラリー

主 催 公益財団法人東京オペラシティアート文化財団、明治学院大学、NHKプロモーション、日本経済新聞社

出品資料 作曲家自筆譜、初版譜、楽器、絵画、演奏会プログラム、ポスター、原稿、書簡、写真、文書など

◆

制作責任 岡部真一郎（明治学院大学図書館付属日本近代音楽館副館長）

総合監修 樋口隆一（明治学院大学教授）

企画構成 林淑姫（明治学院大学大学院客員教授）

制 作 明治学院大学図書館付属日本近代音楽館

【企画の趣旨】

日本の音楽は、一九世紀後半、西洋近代の文化と接触することによって新たな途を歩みはじめた。黒船艦隊の軍楽の響きは鎖国時代の終わりを知らせ、アメリカ人宣教師たちが教える英語や讃美歌は、新しい時代の到来を告げた。そして、一八六八年に樹立された明治維新政府は教育制度に西洋音楽を積極的に導入し、近代国家にふさわしい音楽の構築を試みる。以来一五〇年、日本の近代音楽は、ときに国内外の政治情勢に翻弄されながらも、芸術文化の諸領域と連動し、さまざまな表情をみせつつ、めざましい発展を遂げ、今日の音楽文化の隆盛を築いてきた。

本展は、時代とともにあゆんできた日本近代音楽の激動の一九〇年―幕末維新期から昭和・平成に至る―を再現する。展示は、明治学院大学日本近代音楽館の所蔵資料を中心に、全国の資料館、美術館などに残された資（史）料を一堂に集め、ダイナミックに構成される。

編集後記

館報を発行することになりました。今後は年一度、活動報告とともに資料紹介などを交えた紙面をお届けする予定です。◁音楽館は開館二年目、皆様のご支援に支えられて活動を続けてきました。週三日の開館でご不便をおかけしておりますが、先生方から頂戴した暖かい励ましを胸に、日々業務に取り組みたいと思います。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。◁制作にあたり木杵舎上村部長にお世話になりました。厚く御礼申し上げます。（七階人）

創刊号 二〇一三年二月一日発行

編集発行人 秋月 望

発行所 明治学院大学

図書館付属日本近代音楽館

東京都港区白金台一―二―三七